

令和2年度 自己点検・評価書

令和3年12月

佐賀大学

地域学歴史文化研究センター

I 教育に関する状況と自己評価

(1) 教育に関する状況

- ア、全学教育機構におけるインターフェース科目「佐賀の歴史文化」Ⅰ～Ⅳを企画・運営した。
- イ、専任教員は、全学教育機構・教育学部・芸術地域デザイン学部における日本史関係科目に出講した。
- ウ、図書館や公民館等と連携して、社会教育の分野での活動を積極的に展開した。専任・併任教員による佐賀市立図書館における公開講座「私が教えたい佐賀の歴史と文化 100 分集中講義」を企画・開催した（全3回）。また、専任教員が佐賀県立図書館における古文書講座（各コース8回、2コース）に出講した。みやき町の歴史発見講座にも出講している。

(2) 自己評価

社会教育の面では、新型コロナウイルス禍によって活動が制限された部分はあるものの、前年度に引き続き積極的な活動の実績が残った。

また、前年度末に刊行した郷土学習教育教材『絵本鍋島直正—「鍋島直正公御実歴一百図」を読む—』についても、予想外の反響があり、頒布希望の要望に応えきれないほどであった。本センターの業務における地域の生涯学習の世界での貢献は、大きな意味を持つと言える。

学生教育の面では、全学教育機構開講の授業や芸術地域デザイン学部開講の授業で、地域史に関する研究成果を積極的に活用しており、研究センターとしての活動成果を教育に生かす道を切り開いている。前年度に様々な受賞歴を残した小城藩日記データベースも、on-line で地域史に迫る手掛かりとして、活用している。

ただし、他の研究センターのように学部・大学院と組織的な連関があるわけではないため、専門的な教育の成果をセンターの研究事業にもつなげて生かしていくことは、今後の課題としてある。

II 研究に関する状況と自己評価

(1) 研究に関する状況

- ア、佐賀大学附属図書館所蔵「小城鍋島文庫」に収められた史料のうち、小城藩のまとまった行政記録として重要な価値を持つ「小城藩日記」について、集中的に研究を進めた。前年度に各種の受賞歴を残した小城藩日記データベースを活用・拡張しつつ、研究成果のアウトリーチとして、小城市教育委員会との共催展「小城藩日記の世界——近世小城 200 年の記憶」を実施し、展示図録も刊行した。記念講演会も実施している。
- イ、国文・文献学部門の研究成果として『蓮池藩先賢詩文集』を、地域史・史料学研究部門の研究成果として史料集『長崎警備と佐賀藩』を、それぞれ刊行した。
- ウ、地域学研究の基礎的情報を蓄積するため、須賀神社の史料調査を実施した。
- エ、所属教員や佐賀地域歴史文化に関する学外研究者の成果をまとめた研究紀要第 15 号を刊行した。
- オ、小城藩日記データベースのデータ追加やシステム更新をすすめた。
- カ、国文・文献学研究部門の教員が中心となって「小城鍋島文庫研究会」を運営し、附属図書館所蔵の古典籍の研究を進めた。

- キ、思想史研究部門の教員が中心となり、大学共同利用機関から研究費を獲得して過年度（2017-2018）に実施されていた共同研究、幕末佐賀歌壇研究会の研究結果が、『幕末地方歌壇の研究—佐賀藩の場合—』という報告書となって刊行された。
- ク、学会発表やセミナー発表を進め、論稿の発表を実現した。公刊されたものとしては、単著論文3本（斯界を代表する雑誌への掲載を含む）と、論文集への分担執筆2本、史料紹介2本が挙げられる（専任教員2名・研究機関研究員1名分）。
- ケ、伊藤昭弘センター長は科研費基盤研究（C）「旧藩貸付金からみる幕末期の藩と地域経済の循環構造」（研究代表者、2019-2021年度、2020年度直接経費500千円）、基盤研究（B）「日本列島における鷹・鷹場と環境に関する研究」（研究分担者、2016-2020年度、80千円）、同「巨大塩田地主野崎家史料の総合的研究」（研究分担者、2019-2023年、100千円）、挑戦的研究（開拓）「社会転換期における地域アーカイブズ全国調査の検証と新たな方法の開拓」（研究分担者、2020-2023年度、300千円）を獲得している。三ツ松誠講師は科研費若手研究（B）「国学者西川須賀雄と神道国教化の時代」（研究代表者、2017-2021年度、700千円）、基盤研究（C）「小城鍋島文庫蔵典籍の解題目録と蔵書印データベースの作成」（研究分担者、2018-2021年度、20千円）、基盤研究（B）「感情体制」と生きられた感情—エゴドキュメントに見る「近代性」（2019-2022年度、300千円）を獲得している。吉賀夏子研究機関研究員は、科研費若手研究「文化財書誌の機械可読化普及を目指した低コストなLinked Data自動変換」（研究代表者、2019-2021年度、1,300千円）を獲得している。ほか、特命研究員・特命教授も科研費を獲得している。

（2）自己評価

佐賀の地域史研究を、新型コロナウイルス禍下でますます重要性がましているデジタル人文学と結び付ける形で推進し、成果を地域に還元する事業を実施できた。また、実地での史料調査がやりにくい年度となったが、その反面、史料集・研究報告書の刊行や論稿の公表については、例年以上に活発な年度となった。

外部資金獲得状況についても、件数が増えるなど、努力の成果が見られる。

Ⅲ 国際交流及び社会連携・貢献に関する状況と自己評価

（1）国際交流及び社会連携・貢献に関する状況

- ア、前述の通り、小城市教育委員会との共催展「小城藩日記の世界—近世小城200年の記憶」を開催し、小城藩日記データベースをはじめとした附属図書館所蔵「小城鍋島文庫」に関する研究成果を、市民に公開した。
- イ、上記共催展に伴い講演会を開催した。
- ウ、前述の通り、佐賀県立図書館と協力して古文書講座を実施した。
- エ、前述の通り、佐賀市立図書館と協力して公開講座を開催した。
- オ、前述の通り、みやき町の公開講座に協力し、センターより講師を派遣した。
- カ、美術館と共催で、企画展「北嶋兵一が見た景色」を開催した。前年度に刊行した『絵本鍋島直正—「鍋島直正公御実歴一百図」を読む—』の絵を担当した画家、北嶋兵一について、前年度の調査・研究成果を踏まえ、その画業を概観し、地域に紹介する展示会である。

キ、ウェブサイトを開示し、センター事業の紹介や研究成果の発表を行った。

ク、とりわけ小城藩日記データベースをはじめ、地域史資料に関するデータベースを運用・公開して市民の利用に供した。

(2) 自己評価

新型コロナウイルス禍で、国内外の移動が制限され、国際交流や社会連携の機会が制限されることになった。こうした状況下で実施した講演会・公開講座・企画展は、規模において例年に劣る場合もあったが、反面、来場者にとっては今まで以上に貴重な機会であったともいえる。地域に研究成果を還元するというミッションを可能な限りで果たし得たものと判断する。また、こうした状況乗り越えるためにも、on-lineによる研究成果の発表を積極的に推し進めた一年であった。

IV 組織運営・施設・その他部局の重要な取組に関する状況と自己評価

(1) 組織運営・施設・その他部局の重要な取組に関する状況

ア、専任教員2名、併任教員5名、研究機関研究員1名、特命教員2名、特命研究員2名、教務補佐員1名、事務補佐員1名というスタッフで、センター長を中心とした円滑な組織運営・研究活動に努めた。

イ、各学部から選任された委員、附属図書館長・総合情報基盤センター長など本センターの業務に関わる部局の部局長など学長が必要と認めた委員、本センター長・副センター長・専任教員・部門長により構成する運営委員会（学部の教授会に相当）を2回開催し、センター運営に関わる事案の審議を行った。

ウ、教育学系の一部として、学系長や学系事務らと人事・予算執行などについて協議しながら運営を進めた。

エ、マイクロソフト Teams の導入により、打ち合わせや事務処理のオンライン化・合理化を図った。

(2) 自己評価

新型コロナウイルス禍下にあって、会議のオンライン化など、運営の合理化が図られた。他方、例年にはなかった閉室期間が生じ、本センター所蔵図書の利用希望者にとって不便な時期があったものと思われる。新しい組織運営の在り方が問われている状況であろう。

(3) 明らかになった課題に対する改善の状況

本年度は外部評価が実施された。データベースの運用・公開や地域史資料の調査・整理・活用というセンターの事業に高い評価を受けた一方、時限的な組織の在り方が、こうした史資料・データベースの管理・公開という地域社会における本センターのミッションにとって制約になっている、という課題が指摘された。今後、デジタル人文学時代に対応して、持続可能な地域史資料の研究・保存・公開という役割を果たすため、相応しい組織の在り方を模索している、というのが現状である。